

令和３年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	1	事業分野：共同制作支援事業 助成対象団体名：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成対象活動に関する評価 （妥当性） 当該活動は東京芸術劇場、刈谷市総合文化センター、熊本県立劇場、ザ・オペラ・バンド、刈谷市総合文化センター管弦楽団、九州交響楽団による共同制作である。日本を代表するオペラ「夕鶴」を、今日的な視点による新演出で制作し３回の公演を実施した。公演にあたっては各地域のオーケストラや少年少女合唱団を起用し、各劇場の制作・舞台技術担当者が３都市でのツアーに参加するなど、オペラ制作の経験、感染症対策も含めた運営のノウハウ等が参加団体で共有された。各劇場が業務分担し連携する中で、プロダクションへの参加意識の醸成が図られ、本事業はおおむね適切に実施されたと認められた。 （有効性） 各館の制作担当者が稽古開始前のワークショップから参加して本事業への理解を深め、上演が実現した。本事業を機に、刈谷では児童合唱団が設立され、公演後も活動を継続するなどの波及効果も見られた。新型コロナウイルス感染症にかかわる「まん延防止等重点措置」発令の影響で、刈谷、熊本会場では入場者数が目標値に届かなかったが、今後の劇場運営や地域の音楽文化の活性化に資する成果が認められた。 （効率性） 事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。 また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。 （創造性） 本事業は、演劇界で話題作を次々に演出している岡田利規を起用し、日本の名作オペラとして定着している「夕鶴」に新たな光を当てて創造発信することを目指したプロダクションである。現代社会の象徴として登場人物を性格付け、広く定着した民話的な叙情性とはかけはなれた演出については賛否があるが、原作の戯曲は発表当初から資本主義批判の作品とも言われており、今回の演出がむしろ「原点回帰」であるという見方もできよう。小林沙羅は鶴の化身としての【つう】の非人間性や強い自我を歌と演技で巧みに表現したが、声楽的には無理のある箇所も散見された。【与ひょう】をはじめとする男性陣も搾取する側、される側としての性格表現が的確になされ、児童合唱団が演じた子供たちの「毒気」も、現代の物語として描いている本演出では効果的であった。会場によって指揮者（辻博之、鈴木優人）とオーケストラは異なったが、ソリストや合唱と一体で劇を盛り上げていた。 総じて社会性を有した斬新な視点で創造された本事業は、我が国の実演芸術を向上する牽引力となることができる水準に達し、参加団体の評価向上につながる公演であったと認められ		

る。

（総 評）

1952 年の初演以来すでに 800 回以上上演され、純和風のイメージが浸透したオペラ作品の新制作に取り組んだ本事業は、演劇界の気鋭の演出家の起用により、原作の戯曲のポテンシャルを引き出した斬新な舞台の創造・発信が実現した。マスメディアや専門誌への露出は 75 件あり、そのインパクトは音楽界にとどまらない幅広い層に及んだ。公演開催地域の合唱団やオーケストラを起用し、刈谷では本事業に際して少年少女合唱団を新設するなど、地域の文化活動の活性化を促す効果も認められた。複数の劇場での開催により、各団体でオペラ制作・運営のノウハウが共有され、劇場の人材育成にもつながった。

以上のことから、当該事業は単独ではなし得ない共同制作ならではの成果を上げ、おおむね適切に事業が進められたと認められる。